

児童の社会的情報処理と行動との関連についての研究

— 仲間による挑発場面をめぐる —

筑波大学大学院(博)心理学研究科 濱口 佳和

筑波大学心理学系 新井 邦二郎

A study on the relationships between children's social information processing and their behaviors: in the situation where children are provoked by their peers

Yoshikazu Hamaguchi and Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to investigate the relationships between social information processing (SIP) and reactive behaviors of victims in the situation where children were provoked by a peer. Subjects were 105 elementary school children in the 4th, 5th, and 6th grades (53 boys and 52 girls). Presenting one hypothetical provocative situation, 27 variables including 4 domains of SIP (interpretation of the provocative situation, goal-setting, search of reactive behaviors, evaluation of reactive behaviors) and 4 reactive behaviors (permissive, rational and assertive, emotional and assertive, aggressive) were assessed by means of self-report questionnaires and a peer nomination method. Several sex-differences were found in the SIP variables and reactive behaviors. As a result of multiple regression analysis, it was found that these SIP variables were highly or moderately correlated with all reactive behaviors. Especially, search of reactive behaviors and evaluation of reactive behaviors were found to be important predictors of reactive behaviors.

Key Words: provocative situations, social information processing, social behaviors, questionnaires, elementary school children.

[問題]

社会的情報処理 (social information processing: SIP) とは、「社会的場面において人が社会的手がかりを処理する」ことと定義される。Dodge, Pettit, McClaskey, & Brown (1986) は、符号化、解釈、反応検索、反応評価、実行といった5つの段階からなる SIP モデルを提出し、SIP が、特定の社会的場面における児童の行動の予測子となり、仲間関係における適応と関連があることを実証した。

本研究では、仲間による挑発場面を取り上げ、そこで被害者となった児童の SIP と、その児童が加害

者に対して遂行する応答的行動との関連を検討することが目的とされた。

仲間による挑発場面とは、「仲間によってなんらかの否定的な結果が自己にもたらされる」場面と定義される。その様な場面で、被害者となった子どもが遂行する行動は、仲間関係における適応と密接な関わりがあることが、内外の研究によってすでに明らかにされている (Dodge, Murphey, & Buchsbaum, 1984; Price & Dodge, 1989; 濱口, 1990)。

挑発場面において、被害者が遂行する各種の行動は、被害者がそれに先立って行う SIP によって規定されるものと考えられる。挑発場面において被害者

が行うSIPとしては、Fig.1に示すモデルが考えられる。このモデルではSIPは、(1)挑発状況の解釈、(2)目標設定、(3)応答的行動の検索、(4)応答的行動の評価、の4つの段階から構成される。そして、実際の応答的行動は、SIPのこの4段階を経て遂行されるものと考えられる。以下にこのモデルの概要を述べる。

(1)挑発状況の解釈

挑発状況の解釈の段階では、被害者によって、自己の置かれた状況が解釈される。ここで行われる解釈は、加害者の行為の意図の推測と、もたらされた被害の大きさについての評価(以下、「被害の評価」と略す)が特に重要な構成要素となる。具体的には、加害者が故意に、悪意をもって被害をもたらしたと考える程度(敵対的意図帰属バイアス)と、もたらされた被害が自分にとってどの程度の大きさの痛手と感じているかが査定される。

(2)目標設定

目標設定の段階では、社会的状況の解釈に基づいて、どのような結果の獲得と回避をめざすかが決定される。挑発場面において被害者の立場に置かれた場合、a.加害者との友好的関係を維持する(友好的目標)、b.もたらされた物理的、心理的被害に対して正当な補償を要求する(主張的目標)、c.他の仲間から自分に対して下される評価を向上させる(対人評価的目標)、といった3つの目標が考えられる。そ

して、この3つの目標のそれぞれを、各人がどの程度強くめざすかが査定される。

(3)応答的行動の検索

応答的行動の検索の段階では、(2)で設定した目標を実現するために、加害者に対して行う行動が、自己の行動レパートリーの中から、網羅的に検索される。具体的には、a.思いつくことのできる応答的行動の総数、b.どのような種類の応答的行動をいくつ思いつくことができるか、c.各種類の応答的行動が、思いうかべられた応答的行動の総数に対して占める割合、という3つの観点から指標化が行われる。

(4)応答的行動の評価

応答的行動の評価の段階では、(3)で検索された各種の応答的行動が評価される。このような評価には、a.(2)で設定した諸目標を実現する上での有効性という観点(応答的行動の有効性判断)と、b.実際に自分にその様な行動が遂行できるか(応答的行動の遂行可能性判断)、という観点が考えられ、その2つの観点から査定が行われる。

そこで、本研究では、挑発場面における被害者の応答的行動が、被害者の行うSIPによって規定されるか否かを検討し、さらに、もし応答的行動がSIPによって規定されるのであれば、被害者の行う各種の応答的行動が、どのようなSIPの変数によって説明されるのかを明らかにすることが目的とされた。

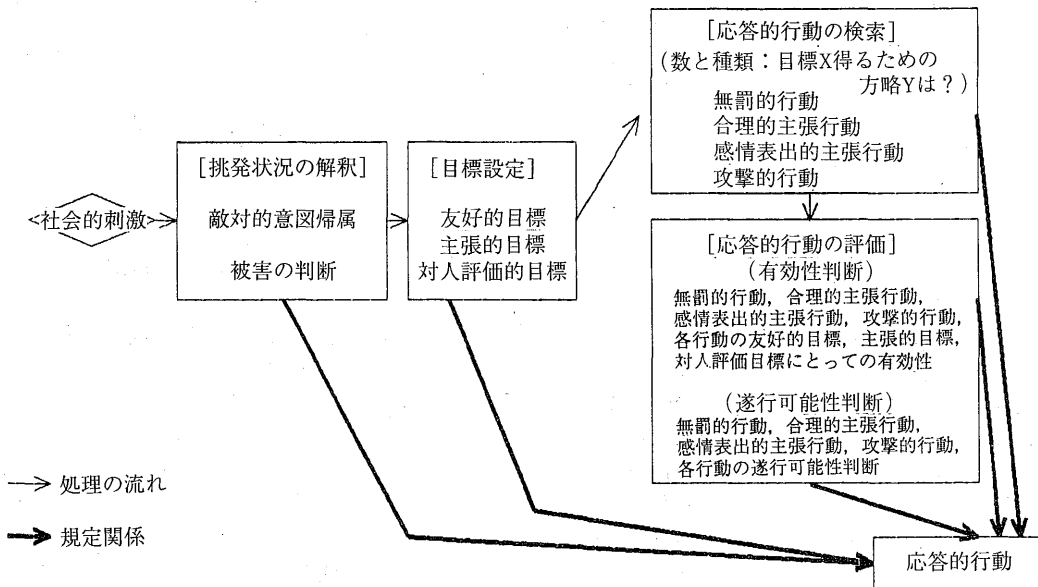


Fig. 1 挑発場面における社会的情報処理モデル

【方法】

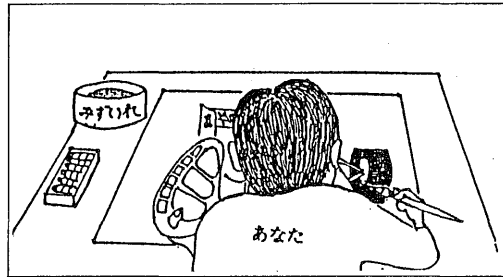
(1) 質問紙

本研究ではSIPならびに応答的行動の測定は、すべて質問紙を用いて行われた。応答的行動には自己報告測度と仲間指名測度の2種類がある。SIPの項目と応答的行動の自己報告測度による項目は、同一の質問紙の中に配置された。応答的行動の仲間指名測度は、ソシオメトリーの測定項目とともに、別の質問紙の中に配置された。ただし、これら全ての質問紙は同一の測定機会に実施された。

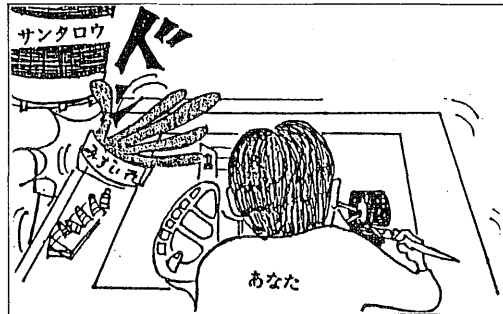
a. SIPの測定

まず、自分のかいていた絵が仲間によってびしょぬれにされるという、架空の挑発エピソードが、Fig. 2に示すような4コマ漫画によって呈示された。そして、被験者は、自分がエピソード中の被害者であることを想定して、挑発状況の解釈、目標設定、応答的行動の検索、応答的行動の評価というSIPの4段階を構成する諸変数を測定する質問項目に回答するように求められた。この4コマ漫画は、B4版の一枚の紙に印刷されており、質問紙と一緒に被験者各自に配布された。被験者はSIPと応答的行動の測定中、必要に応じていつでも参照できるように、4コマ漫画のかかれた紙を常に机に出しておくよう教示された。SIP質問紙の質問項目数は全部で36であった。その内訳は、挑発状況の解釈5項目(敵対的意図帰属バイアス4項目、被害の評価1項目)目標設定6項目(友好的目標、主張的目標、対人評価的目標、各2項目)、応答的行動の検索5項目、応答的行動の評価20項目(応答的行動の有効性判断12項目、応答的行動の遂行可能性判断8項目)であった。個々の質問項目については付録1を参照されたい。回答方法は、応答的行動の検索を除いて、すべて5段階の評定尺度法であった。

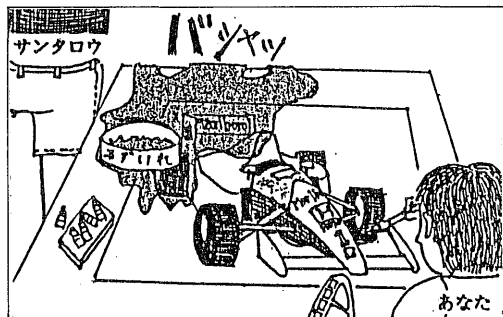
応答的行動の検索の測定においては、Fig. 3に示すように、机に向かって座っている被害者と、そのかたわらに立っている加害者がひとコマの漫画で呈示された。そして、漫画のフキダシの中に被害者のセリフを記入させ、そのセリフを言っている時の顔面表情を、「怒った顔」「困った顔」「普通の顔」「泣いた顔」の4つの中から選ばせるという方法が採用された。そこで得られた反応は、セリフと顔面表情の組み合わせによって、無罰行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動、驚愕・困惑・落胆の表出行動、その他の非攻撃的行動の6つのカテゴリーに分類された(各行動の定義と分類基準は、付録2に挙げる)。質問紙にはこのひとコマ漫画が5つかかれており、被験者は最大限5つまで、思い



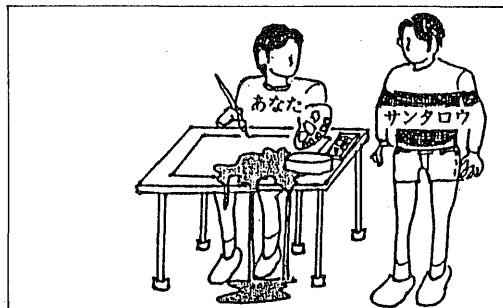
あなたは教室で絵をかいていました。



そこに、同級生のサンタロウくんがやってきて、あなたの机にぶつかりました。



水入れの水が、絵の上にもこぼれてしまいました。



水は、机とゆかの上にもこぼれてしまいました。

Fig. 2 仮想挑発場面の呈示に用いられた4コマ漫画 (男子用)

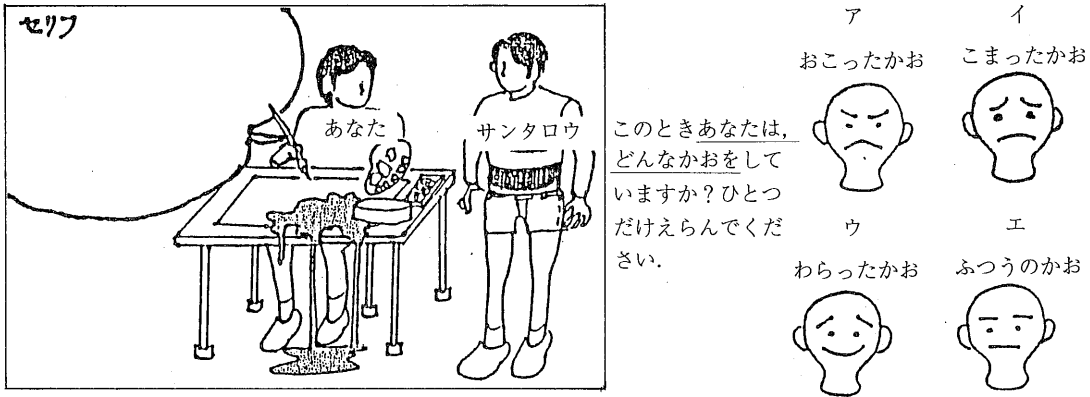


Fig. 3 応答的行動の検索の測定に用いられた1コマ漫画

ついた応答的行動を上記の方法で記述することが可能であった。

応答的行動の有効性判断においては、無罰的行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動の代表的な例が1つずつ呈示され、その各々について、友好的、主張的、対人評価的という3つの目標を実現する上での有効性判断が、それぞれ尋ねられた。

応答的行動の遂行可能性判断においては、無罰的行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動の代表的な例が3つずつ呈示され、それぞれの行動を実際に遂行する主観的な難易度が尋ねられた。

b. 応答的行動の査定

(自己報告測定)

これは、SIPの質問に続けて測定された。被験者は、SIPの測定で呈示された4コマ漫画を、再び見るよう求められた。そして、被験者各自が被害者であるという想定の下で、無罰的行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動(各行動4項目、合計16項目)をそれぞれどの程度遂行するかが、5段階評定法によって測定された。

(仲間指名測定)

被験者は、「友だちに、自分が作っていたものを壊されたり、かいていた絵をぬらされたりしたときに、『気にしないで』と許してあげられる仲間(無罰行動)と、同様の場面で『おこったりしないで、『もうすこし気をつけてね』と言える仲間(合理的主張行動)を、同性の同級生の中からそれぞれ5人選び、その氏名を記述するよう求められた。攻撃的行動と感情表出的主張行動は、否定的な意味合いの強いものであるため、仲間指名は行わなかった。

(2) 被験者

茨城県下の公立小学校1校の4, 5, 6学年の男女児童が被験者とされた。各学年1学級づつが調査の対象とされ、被験者数は、男子53名、女子52名、合計105名であった。

(3) 実施期日

1991年7月中旬。正規の授業時間を1時間割き、学級担任の指示と監督の下で、集団事態で全ての質問紙が実施された。

[結果と考察]

(1) 評定者間一致率

SIP変数の応答的行動の検索では、被験者によって産出された応答的行動が、無罰行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動、驚愕・困惑・落胆の表出行動、その他の非攻撃的行動の6種類のカテゴリーに分類された。被験者によって産出されたすべての応答的行動の分類は、第一著者と大学で心理学を専攻する学生1名により行われた。評定者間一致率は、無罰行動で93.5%、合理的主張行動で85.7%、感情表出的主張行動で89.1%、攻撃的行動で89.5%、驚愕・困惑・落胆の表出行動で93.0%、その他の非攻撃的行動で89.0%であった。すべてのカテゴリーについて、ほぼ満足のいく評定者間一致率が得られたと言えよう。

(2) 下位尺度の等質性の検討

挑発状況の解釈、目標設定、応答的行動の有効性判断、応答的行動の遂行可能性判断の各領域に属するSIPの質問項目は、それぞれの領域内でまとめら

れ、いくつかの下位尺度が構成された。ここでは、構成された下位尺度の等質性についてふれる。構成された下位尺度は、挑発状況の解釈の領域では、敵対的意図帰属バイアス(4項目から構成される)、目標設定の領域では、友好的目標、主張的目標、対人評価的目標(それぞれ2項目から構成される)、応答的行動の有効性判断の領域では、無罰行動、合理的主張行動、感情表出的主張行動、攻撃的行動、それぞれの行動の有効性判断(それぞれ3項目から構成される)、応答的行動の遂行可能性判断の領域では、無罰行動の遂行可能性判断、感情表出的主張行動の

遂行可能性判断、攻撃的行動の遂行可能性判断(それぞれ2項目から構成される)であった。全被験者のデータをもとに、各下位尺度ごとにクロンバックの α 係数を算出したところ、Table 1に示すような結果が得られた。敵対的意図帰属バイアスと攻撃的行動の遂行可能性判断で、項目数が少ないながらも、それぞれ、.87と.91という高い α 係数が得られ、この2つの下位尺度は等質な単一の心理的特性を測定していることが明らかになった。合理的主張行動の有効性判断、無罰行動の遂行可能性判断、感情表出的主張行動の遂行可能性判断では、それぞれ、.73、

Table 1 SIP 諸変数の平均と標準偏差

SIP/	男子		女子		全体		α 係数
	平均(SD)	n	平均(SD)	n	平均(SD)	n	
(挑発状況の解釈)							
敵対的意図帰属バイアス	8.43(3.90)	53	7.63(2.72)	52	8.04(3.37)	105	.87
被害の評価	3.76(1.09)	53	3.75(1.00)	52	3.75(1.04)	105	—
(目標設定)							
友好的目標	7.68(2.22)	53	8.25(0.20)	52	7.96(1.90)	105	.64
主張的目標	8.04(1.69)	53	7.66(1.65)	50	7.85(1.67)	103	.58
対人評価的目標	8.14(1.84)	52	8.42(1.66)	52	8.28(1.75)	104	.48
(応答的行動の検索)							
総産出数	3.89(1.22)	53	4.08(1.14)	52	3.98(1.18)	105	—
無罰行動の産出数	0.77(0.97)	53	1.21(1.32)	52	0.99(1.17)	105	—
合理的主張行動の産出数	0.47(0.78)	53	0.54(0.83)	52	0.51(0.80)	105	—
感情表出的主張行動の産出数	1.30(1.03)	53	0.83(0.17)	52	1.07(1.14)	105	—
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出数	0.53(0.82)	53	0.83(1.00)	52	0.68(0.92)	105	—
その他の非攻撃的行動の産出数	0.06(0.31)	53	0.10(0.45)	52	0.08(0.39)	105	—
攻撃的行動の産出数	0.55(0.97)	53	0.17(0.38)	52	0.36(0.76)	105	—
無罰行動の産出率	0.21(0.27)	53	0.30(0.32)	52	0.26(0.30)	105	—
合理的主張行動の産出率	0.12(0.20)	53	0.13(0.20)	52	0.12(0.20)	105	—
感情表出的主張行動の産出率	0.37(0.33)	53	0.19(0.26)	52	0.28(0.31)	105	—
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出率	0.13(0.23)	53	0.22(0.27)	52	0.18(0.25)	105	—
その他の非攻撃的行動の産出率	0.01(0.06)	53	0.02(0.11)	52	0.02(0.09)	105	—
攻撃的行動の産出率	0.12(0.20)	53	0.04(0.09)	52	0.08(0.16)	105	—
(応答的行動の有効性判断)							
無罰行動	11.62(2.70)	53	11.86(1.55)	50	11.74(2.21)	103	.69
合理的主張行動	11.83(2.32)	53	11.80(0.26)	51	11.82(2.08)	104	.73
感情表出的主張行動	9.02(2.65)	53	7.96(2.04)	50	8.50(5.84)	104	.63
攻撃的行動	6.25(2.84)	53	5.50(2.36)	52	5.88(2.63)	105	.67
(応答的行動の遂行可能性判断)							
無罰行動	4.88(2.30)	51	6.69(1.80)	52	5.28(2.39)	103	.74
合理的主張行動1	3.02(1.37)	53	3.27(1.36)	52	3.14(1.36)	105	—
合理的主張行動2	2.79(1.20)	53	2.31(1.10)	51	2.56(1.17)	104	—
感情表出的主張行動	5.89(2.27)	52	5.02(2.35)	52	5.45(2.34)	104	.74
攻撃的行動	5.85(2.92)	53	4.31(2.67)	51	5.10(2.89)	104	.91

.74, .74という比較的高い α 係数が得られた。これらの下位尺度では、尺度を構成する項目の数が2~3項目と少ないことを考えると、この程度の高さの α 係数でも、満足すべきではないかと思われる。友好的目標、無罰行動の有効性判断、感情表出的主張行動の有効性判断、攻撃的行動の有効性判断、主張的目標では、それぞれ、.64, .69, .63, .67, .58という中程度の高さの α 係数が得られたにとどまった。また、対人評価的目標の α 係数は.48とやや低いので、本研究における対人評価的目標の分析結果については、参考程度にとどめるのが妥当であろうと思われる。なお、合理的主張行動の遂行可能性判断(2項目から構成される)の α 係数はほとんど0に近く、尺度化が不可能であったので、2項目の得点を合計せず、後の分析においては、それぞれ、合理的主張行動1の遂行可能性判断、合理的主張行動2の遂行可能性判断と別個の変数として扱われた。

自己報告の行動測度においても、SIP変数の場合同様、4つの下位尺度が構成された。これらの行動測度の α 係数をTable 2に示す。ここでも合理的主張行動の α 係数は.46とやや低いものの、無罰行動、攻撃的行動、感情表出的主張行動の α 係数は、それぞれ、.88, .86, .76とほぼ満足のいく高さであった。

(3) 性差の検討

SIP各変数ならびに行動測度について、t検定により性差の検討を行った。Table 1にSIP各変数の、Table 2に各行動測度の性別ならびに全体の平均値と標準偏差を示す。また、有意差および有意傾向の見られた変数にかぎり、t検定の結果をTable 3に示す。尚、学年差の検討は、各学年1学級分のデータしか得られなかったため、今回は行われなかった。

SIPに関しては、有意な性差が見られた変数は応答的行動の検索に属するものが多かった。応答的行動

の検索の諸変数は、既に述べたように、漫画のフキダシの中にセリフを被験者自身が書くという一種の自由記述的な測定法が採用されたので、より自然に近い児童の反応が引き出されたためではないかと思われる。感情表出的行動の産出数と産出率、攻撃的行動の産出数と産出率では、いずれも、女子よりも男子の方が有意に高い数値を示している。また、合理的主張行動2の有効性判断においても、女子よりも男子の方が有意に高いという結果が得られている。感情表出的主張行動の有効性判断と攻撃的行動の遂行可能性判断では、男子が女子よりも高くなる傾向が見られた。一方、驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出数と産出率では、男子よりも女子の方が高くなる傾向が見られた。

行動測度に関しては、合理的主張行動、感情表出的主張行動において女子よりも男子の方が、無罰行動においては、男子よりも女子の方が有意に高いことが明らかになった。攻撃的行動では女子よりも男子の方が、仲間指名測度の無罰行動では、男子よりも女子の方が高くなる傾向が示された。

Maccoby(1990)は、社会的行動の性差に関する研究を概観しつつ、男子は他者に対する優位性を求める対人的相互作用のスタイルを、女子は他者との親密な関係を求めるスタイルを獲得すると指摘している。このMaccobyの説に立脚するならば、仲間から一方的に被害をこうむる挑発場面では、男子は女子よりも、主張的または攻撃的になり、逆に女子は男子よりも、友好的になると考えられる。従って、攻撃的行動、感情表出的行動、合理的主張行動と、それらに関するSIP変数において、女子よりも男子のほうが高いことを、無罰行動が男子よりも女子の方が高いことを示す今回の結果はまず妥当なものであると言えよう。なお、驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出数と産出率において男子よりも女子のほう

Table 2 行動測度の平均と標準偏差

行動測度/	男子		女子		全体		α 係数
	平均(SD)	n	平均(SD)	n	平均(SD)	n	
無罰行動	12.33(4.45)	52	14.00(3.33)	51	13.16(4.00)	103	.88
合理的主張行動	8.75(2.84)	52	7.58(2.14)	52	11.54(2.74)	103	.46
感情表出主張行動	11.21(3.70)	52	9.73(3.19)	51	10.48(3.52)	103	.76
攻撃的行動	9.24(4.07)	51	6.96(3.13)	52	8.09(3.79)	103	.86
無罰行動(PN)	0.18(0.13)	53	0.23(0.18)	52	0.21(0.16)	105	—
合理的主張行動(PN)	0.18(0.12)	53	0.20(0.12)	52	0.19(0.12)	105	—

(表中、PNとあるのは、仲間指名測度であることを意味する)

Table 3 性差のあった変数

変数名		t(df)	P
(SIP 変数)			
感情表出的主張行動の産出数	女<男	2.18 (103)	p<.05
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出数	男<女	1.69 (103)	p<.10
攻撃的行動の産出数	女<男	2.59 (103)	p<.05
感情表出的主張行動の産出率	女<男	3.13 (103)	p<.01
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出率	男<女	1.85 (103)	p<.10
攻撃的行動の産出率	女<男	2.65 (103)	p<.01
感情表出的主張行動の有効性判断	女<男	2.28 (103)	p<.10
合理的主張行動2の遂行可能性判断	女<男	2.12 (102)	p<.05
攻撃的行動の遂行可能性判断	女<男	1.91 (102)	p<.10
(行動測定)			
無罰的行動	男<女	2.16 (101)	p<.05
合理的主張行動	女<男	2.38 (102)	p<.05
感情表出的主張行動	女<男	2.18 (101)	p<.05
攻撃的行動	女<男	3.18 (101)	p<.10
無罰(PN)	男<女	1.81 (103)	p<.10

が高かったが、これらの感情はいずれも、加害者本人に対して向けられた感情とは必ずしも言えない。挑発場面においては、加害者に対する怒りも喚起されがちであると思われるが、女子は他者との親密な関係を維持しようとする傾向が強いため、敢えて怒りを表出せず、驚愕・困惑・落胆といった感情を代わりに表出するという傾向があることを、今回の結果は示唆しているように思われる。

(4) SIP と応答的行動との関連の検出

Table 1 に挙げた28のSIP変数を説明変数とし、Table 2 に挙げた6つの行動測定の各々を基準変数として、重回帰分析を行った。結果をTable 4 に示す。

6つの重相関係数(R)はすべて有意となった。このことから、自己報告測定と仲間指名測定で応答的行動を測定した場合には、挑発場面における行動はSIPの諸変数によって説明されると言えよう。得られた重相関係数の値も、自己報告測定では、無罰行動が.84、感情表出的主張行動が.78、攻撃的行動が.80という高い数値を示している。自己報告測定の合理的主張行動では、重相関係数の値は.48と他の自己報告測定と比較するとやや低いが、これは、行動測定の α 係数が低かったためにもたらされた結果と思われる。また、仲間指名測定では、無罰行動では.37とやや低いが、合理的主張行動では.54という

中程度の高さの重相関係数が得られている。自己報告測定が仲間指名測定よりも一般に高い重相関係数を示しているが、これは、自己報告測定で測定された行動が、行動そのものではなく、あくまでも被験者自身の自己意識に反映されたものであるためと思われる。応答的行動の遂行可能性判断の諸変数に有意な偏回帰係数が多く見られ、SIP諸変数の中では、この領域の変数が、重相関係数の値を高めるうえで最も貢献していると言えるが、応答的行動の遂行可能性判断は、当該行動を遂行する主観的難易度を意味しており、自己の行動についての意識に深く関与するものと考えられる。そのために、自己報告測定が仲間指名測定よりも一般に高い重相関係数を示したのと考えられる。

次に、応答的行動別にSIPと応答的行動の結果を概観してみる。まず、自己報告測定の無罰行動では、敵対的意図帰属バイアスと感情表出的主張行動の遂行可能性判断において、有意な負の標準化偏回帰係数が示され、友好的目標と無罰行動の遂行可能性判断において、有意な正の標準化偏回帰係数が示された。それぞれのSIP変数の内容を考慮すれば、これらの結果はいずれも容易に解釈可能で妥当なものと思われる。

自己報告測定の合理的主張行動では、感情表出的主張行動の産出率と感情表出的主張行動の遂行可能性判断において有意な正の標準化偏回帰係数が得ら

Table 4 SIP 諸変数の行動測度への重回帰分析結果

SIP / 行動測度	無罰	合理的主張	感情表出的主張	攻撃	無罰(PN)	合理的主張(PN)
(挑発状況の解釈)						
敵対的意図帰属バイアス	-.22**	-.14	.09	.15 ⁺	-.03	-.07
被害の評価	-.00	.10	.08	.10	-.01	-.07
(目標設定)						
友好的目標	.22*	.05	-.00	-.08	.08	.20 ⁺
主張的目標	.05	.17	-.05	-.00	-.00	-.07
対人評価的目標	.11	.04	-.01	-.04	-.11	.01
(応答的行動の検索)						
総産出数	.01	.03	.06	-.05	.13	-.03
無罰行動の産出数	.09	.14	-.04	-.01	-.07	.06
合理的主張行動の産出数	.07	.10	.01	-.10	.25*	.13
感情表出的主張行動の産出数	-.02	.10	.00	-.28	.40	.05
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出数	-.05	-.03	.00	.07	.06	-.09
その他の非攻撃的行動の産出数	-.02	-.02	.01	-.03	-.03	-.08
攻撃的行動の産出数	-.01	-.12	.09	.37***	-.02	.22*
無罰行動の産出率	.12 ⁺	.17	-.09	-.02	-.12	.12
合理的主張行動の産出率	.04	.07	.02	-.09	.11	.42***
感情表出的主張行動の産出率	-.05	.28**	.27**	.22***	-.23*	-.03
驚愕・困惑・落胆の表出行動の産出率	-.08	-.03	-.01	-.08	.09	-.03
その他の非攻撃的行動の産出率	-.04	-.01	.01	-.02	-.04	-.07
攻撃的行動の産出率	-.01	-.13	.10	-.49	-.02	-.12
(応答的行動の有効性判断)						
無罰行動	.08	-.06	-.07	-.08	-.11	-.12
合理的主張行動	.08	.03	-.02	-.04	-.14	-.01
感情表出的主張行動	.08	-.01	-.16*	-.12 ⁺	-.07	-.01
攻撃的行動	.09	.03	.06	-.10	-.03	.08
(応答的行動の遂行可能性判断)						
無罰行動	.36***	.09	-.28***	.08	.13	.42**
合理的主張行動 1	.00	.05	-.10	-.19**	.03	-.25*
合理的主張行動 2	.02	.11	.04	.12	.03	-.07
感情表出的主張行動	-.34***	.29**	.43***	.04	.16	-.07
攻撃的行動	-.11	-.19	-.10	.40***	-.02	-.14
R	.84***	.48***	.78***	.80***	.37**	.54***
F (df)	48.8(4,83)	12.7(2,85)	32.9(4,83)	37.9(4,83)	6.67(2,85)	8.45(4,84)

(表中の数値は標準化偏回帰係数. +p<.01, *p<.05, **p<.01, ***p<.001)

れた。合理的主張行動の産出率や合理的主張行動の遂行可能性判断ではなく、感情表出的主張行動の産出率と感情表出的主張行動の遂行可能性判断において有意な標準化偏回帰係数が得られたことは、やや意外な結果である。しかしこれは、感情表出的主張行動と合理的主張行動の相違を区別することが、児

童にとっては困難であったためではないかと思われる。既に述べたように、自己報告測度の合理的主張行動は、尺度化に問題を残しているため、今回得られた結果から、早急に結論を出すことは控えるべきであろう。

自己報告測度の感情表出的主張行動では、感情表

出の主張行動の産出率、感情表出的主張行動の遂行可能性判断において有意な正の標準化偏回帰係数が得られた。また、無罰行動の遂行可能性判断において、有意な負の標準化偏回帰係数が示された。これらの結果も、それぞれのSIP変数の内容を考慮すれば、いずれも容易に解釈可能で妥当なものと思われる。

自己報告測度の攻撃的行動では、攻撃的行動の産出数、感情表出的行動の産出率、攻撃的行動の遂行可能性判断において有意な正の標準化偏回帰係数が得られた。また、合理的主張行動1の遂行可能性判断において、有意な負の標準化偏回帰係数が示された。これらの結果も、おおむね容易に解釈可能なものと思われる。ただ、感情表出的行動の産出率が有意な正の標準化偏回帰係数を示したが、この行動は否定的な感情の表出(怒った表情)を伴うので、ともすれば攻撃的行動に発展する可能性があるため、このような結果が得られたのではないかと推察される。なお、感情表出的主張行動の産出数と攻撃的行動の産出率においても、無視できない大きさの標準化偏回帰係数が得られたが、有意性検定ではn.s.となった。

仲間指名測度の無罰行動では、合理的主張行動の産出数において有意な正の標準化偏回帰係数が、感情表出的主張行動の産出率において有意な負の標準化偏回帰係数が得られたにとどまった。

仲間指名測度の合理的主張行動では、合理的主張行動の産出率、無罰行動の遂行可能性判断、合理的主張行動1の遂行可能性判断で有意な正の標準化偏回帰係数が得られた。これらの結果も、それぞれのSIP変数の内容を考慮すれば、いずれも容易に解釈可能で妥当なものと思われる。

SIPの領域別に見ると、自己報告測度にせよ、仲間指名測度にせよ、行動測度に対して有意な予測子となった変数には、応答的行動の検索の領域と応答的行動の遂行可能性判断の領域に属するものが多かった。挑発状況の解釈、目標設定、応答的行動の有効性判断の3領域を取り上げた濱口(1990)では、目標設定の諸変数が比較的強力な予測子となっていたが、今回得られたデータでは、その様な結果は再現されなかった。その点に関してはさらにデータを蓄積し、検討を加える必要がある。また、無罰的行動と合理的主張行動は、自己報告と仲間指名という2つの異なった種類の測度が得られたが、それぞ

れ有意な関連を示したSIP変数が異なる場合もあった。今後は、教師評定や行動観察などによる行動測度も加え、測度の種類の差異を越えて一貫した関連性を示すSIP変数と、測度の種類に固有な関連性しか示さないSIP変数を特定することが必要であろう。

引用文献

- Dodge,K.A.,Murphy, R.B.,& Buchsbaum,K. 1984 The assessment of intention-cue detection skills in children: implication for developmental psychopathology. *Child Development*, **55**, 163-173.
- Dodge,K.A., Pettit,G.S., McClasky,C.L., & Brown,M.M. 1986 Social competence in children. *Monographs of the society for research in child development*, No.213. (Vol.51, No.2)
- 濱口佳和 1990 Provocation場面における児童の Social Competenceの研究—社会認知的変数とそれに関連する要因の検討—。筑波大学修士論文
- Maccoby,E.E. 1990 Gender and relationships *American Psychologist*, **45**, 513-520.
- Price,J.M., & Dodge,K.A. 1989 Reactive and provocative aggression in childhood: relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Psychology*, **17**, 455-471.

要約

本研究の目的は、仲間による挑発場面における、被害者の社会的情報処理と応答的行動との関連を検討することであった。被験者としては、4～6年生の105名の小学校児童(男子53名、女子52名)が対象とされた。架空の挑発場面を提示しつつ、被験者自身が被害者となった場合を想定して、社会的情報処理の4つの領域(挑発状況の解釈、目標設定、応答的行動の検索、応答的行動の評価)に属する27の社会的情報処理の変数と、そこでの応答的行動が自己報告形式の質問紙と仲間指名測度により測定された。

重回帰分析の結果、これらの社会的情報処理変数は応答的行動と中程度あるいは高い相関を示し、特に、応答的行動の検索と応答的行動の評価が応答的行動の重要な予測子となることが明らかにされた。

付録1. SIPならびに行動測度の質問項目

[SIPの質問項目]

I. 挑発状況の解釈

a. 敵対的意図帰属バイアス

- (1) サンタロウくんは、いじわるをしてやろうと
おもって、わざとあなたのつくえにぶつ
かったのでしょか？
- (2) サンタロウくんは、「いいきみだ!」とおも
っているでしょか？
- #(3) サンタロウくんは、わざとぶつかろうとした
のでなく、たまたまぶつかってしまったのだ
とおもいますか？
- #(4) サンタロウくんは、「ほくがわるいんだから、
あやまろう」とおもっているでしょか？
(ぜったいそうじゃない-1点~ぜったいそうだ
-5点)

b. 被害の評価

- (1) サンタロウくんは、あなたのつくえにぶつ
かって、水入れの水をこぼし、あなたのか
いていた絵とつくえとゆかをぬらしてしま
いました。これは、あなたにとって、どれくら
い、ひどいことですか？
(ぜんぜんひどいことじゃない-1点~すごくひ
どいこと-5点)
#は逆転項目

II. 目標設定

a. 友好的目標設定

- (1) 「サンタロウくんを、いやなきもちにさせた
くない」とおもいますか？
- (2) 「サンタロウくんとは、これからも、なかよ
しでいたい」とおもいますか？

b. 主張的目標

- (1) 「サンタロウくん、あやまってほしい」と
おもいますか？
- (2) 「サンタロウくん、ぬれてしまったつくえ
とゆかをふいてほしい」とおもいますか？

c. 対人評価的目標

- (1) 「ほかのともだちから、いいひとだと言われ
たい」とおもいますか？
- (2) 「ほかのおともだちからいやなひとだと言
われたくない」とおもいますか？
(ぜんぜんそうおもわない-1点~ほんとうにそ
うおも-5点)

III. 応答的行動の検索(Fig. 3参照)

IV. 応答的行動の評価

a. 応答的行動の有効性判断

(1) 無罰的行動の有効性判断

もしあなたが、おこらないで、サンタロウくん
に「だいじょうぶだよ。きにしないで」といったら、
どうなるでしょう？

(ア) サンタロウくんは、いやなきもちになら
ず、これからも、なかよしでいられるで
しょうか？(友好的目標に対する有効性)
(ぜったいにそうならない-1点~ぜったいにそ
うなる-5点)

(イ) サンタロウくんは、あやまってきて、
つくえやゆかをふいてくれるとおもいま
すか？(主張的目標に対する有効性)
(ぜったいそうしてくれない-1点~ぜったいそ
うしてくれる-5点)

(ウ)ほかのともだちは、あなたのことを「い
いひとだな」とおもうでしょか？
(対人評価的目標に対する有効性)

(ぜったいにおもわない-1点~ぜったいにおも
う-5点)

* (ア)~(エ)の質問項目は(2)(3)(4)ともに同じ
である。

(2) 感情表出的主張行動の有効性判断

もし、あなたが、すこしおこって、「ああ、ぬれ
ちゃった。もうすこしきをつけてよ。」と言ったら、
どうなるでしょう？

(3) 攻撃的行動の有効性判断

もし、あなたが、おこって、サンタロウくんにら
んぼうなことをしたり、ひどいことをいったりし
たらどうなるでしょう？

(4) 合理的主張行動の有効性判断

もし、あなたが、おこらないで、「もうすこしき
をつけてね。」と言ったら、どうなるでしょう？

b. 応答的行動の遂行可能性判断

(無罰的行動の遂行可能性判断)

(1) こんなとき、おこらないで、サンタロウくん
に「だいじょうぶだよ。きにしないで」と言うのは、
あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？

(2) こんなとき、おこらないで、サンタロウくん
に、「かきなおすから、いいよ。」と言うのは、あな
たにとって、どのくらいむずかしいですか？

(合理的主張行動の遂行可能性判断)

(1) こんなとき、おこらないで、「どうしてこん
なことするの?」と言ったのは、あなたにとって、ど
のくらいむずかしいですか？

(2) こんなとき、おこらないで、サンタロウくん
に、

「もうすこしきをつけてね。」と言うのは、あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？

(感情表出的主張行動の遂行可能性判断)

- (1) こんなとき、すこしおこって、サンタロウくん、「ああ、ぬれちゃった。もうすこしきをつけてよ」と言うのは、あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？
- (2) こんなとき、すこしおこって、「どうしてこんなことするの？」と言うのは、あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？

(攻撃的行動の遂行可能性判断)

- (1) こんなとき、おこって、サンタロウくん、「らんぼうなことをするのは、あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？
- (2) こんなとき、おこって、サンタロウくん、「ひどいことを言うのは、あなたにとって、どのくらいむずかしいですか？
(とてもむずかしい-1点~とてもかんたん-5点)

[行動測度の質問項目]

I. 自己報告測度

サンタロウくんがあなたのつくえにぶつかったので、水入れの水がこぼれてあなたのかいていた絵とつくえとゆかががぬれてしまいました。こんなとき、あなたはどうしますか？

a. 無罰的行動

- (1) おこったりしないで、サンタロウくん、「だいたいじょうぶだよ、きにしないで。」と言いますか？
- (2) おこったりしないで、サンタロウくん、「かきなおすから、いいよ。」と言いますか？
- (3) おこったりしないで、サンタロウくん、「わざとじゃないんだから、しかたがないよ。」と言いますか？
- (4) おこったりしないで、サンタロウくん、「たまたまこうなっちゃっただけなんだから、きにしないでいいよ。」と言いますか？

b. 合理的主張行動

- (1) おこったりしないで、サンタロウくん、「もうすこし、きをつけてね。」と言いますか？
- (2) おこったりしないで、サンタロウくん、「どうしてこんなことするの？」と言いますか？
- (3) おこったりしないで、「あやまるぐらいは、してほしいなあ。」と言いますか？
- (4) おこったりしないで、サンタロウくん、「つくえとゆかをふいてくれないかなあ」と言いますか？

c. 感情表出的主張行動

- (1) すこしおこって、サンタロウくん、「どうしてこんなことするの？」と言いますか？
 - (2) すこしおこって、サンタロウくん、「ああ、ぬれちゃった。もうすこしきをつけてよ。」と言いますか？
 - (3) すこしおこって、サンタロウくん、「びしょびしょだ。つくえとゆかをふいてよ。」と言いますか？
 - (4) すこしおこって、「あやまってよ。」と言いますか？
- #### d. 攻撃的行動
- (1) おこって、サンタロウくん、「らんぼうなことをしますか？
 - (2) おこって、サンタロウくん、「ひどいことを言ったりしますか？
 - (3) おこって、サンタロウくんとは、もう口をきくのをやめますか？
 - (4) おこって、サンタロウくん、「しかえししますか？
(ぜったいにそうしない-1点~ぜったいにそうする-5点)

II. 仲間指名測度

(無罰的行動)

友だちに、じぶんが作っていたものをこわされたり、かいていた絵をぬらされたりしても、「気にしないで」と言って、その友だちをゆるしてあげられる人はだれですか？

(合理的主張行動)

友だちに、じぶんが作っていたものをこわされたり、かいていた絵をぬらされたりしても、おこったりしないで、「もうすこし気をつけてね」とその友だちに言える人はだれですか？

付録2. 応答的行動の検索における分類カテゴリ

[無罰的行動]

(定義)

報復的行動や主張的行動を行わず、許容し、加害者の心理的、物理的、負担を軽減する言動

(顔面表情)

笑顔、普通の顔、困惑のどれか

(セリフの例)

「いいよ、すぎたことだし」「きにしないでいいよ」「へいきへいき」「またかくから」「マツコさんはだいたいじょうぶだった?」「じぶんでふくから」「な

かよしていようね」「なかなかおりしよう」

[合理的主張行動]

(定義)

相手に非があると考えながらも、怒りなどの喚起された否定的な感情を表出せず、丁寧な言葉づかいで*、加害者に対して、釈明、注意の喚起、謝罪、補償的措置など、被害者の立場として正当な要求を主張する言動。または、相手に非があることを表明する行動、加害行為に対する抗議。

(顔面表情)

笑顔、普通の顔、困惑(困惑は言葉づかいが丁寧な場合に限定)のどれか

(セリフの例)

「気をつけてね」「そんなことしないでね」「これからは、気をつけてね」「どうしてこんなことするの?」「わざとじゃないよね?」「あやまってほしいなあ」「つくえとゆかをふいてね」「いっしょにふこう」「じぶんもやられると、いやでしょ」「ちょっとひどいんじゃない?」「責任とってね」「どうするの?」「ああ、こぼしちゃった」

* 「丁寧な言葉づかい」とは、「丁寧」を表す終助詞で終わっているもの、または、「～なの?」「～してね」「～しよう」「してくれよ?」「～してくれないかなあ?」といった語尾で終わるものを指す。

「～だ」というような常体文、または単に「～して」「～してよ」という語尾で終わっている場合、顔面表情が笑顔か普通の顔であれば、このカテゴリーに含められる。

[感情表出的主張行動]

(定義)

相手に非があると考え、困惑、怒りなどの喚起された否定的な感情を表出しつつ、丁寧さを欠く言葉づかい**で加害者に対して、釈明、注意の喚起、謝罪、補償的措置など、被害者の立場として正当な要求を主張する言動。または、相手に非があることを表明する行動、加害行為に対する抗議

(顔面表情)怒りまたは困惑(困惑は言葉づかいが丁寧な場合を除く)、普通の顔(ただし普通の顔は、言葉づかいが丁寧さを欠く場合に限定される)

(セリフの例)

「なんでこんなことするんだ」「こんどから気をつけろよな」「机と床をふけよ」「弁償しろ!」「ちゃんちゃん、あやまれよ」「きをつけろよ」「ぶつかってこないで」「やめろ。」「おまえがやられたらどういう気持ちになる!」「なんだよ!」「ひでえな!」「ふざけんじゃねえ!」「なにすんだよ」

「よくもやったな!」「責任とれよ」「どうしてくれるんだよ」「ああ、こぼしちゃった」

** 「丁寧さを欠く言葉づかい」とは、「～しろ」「～しなさい」「～しろよな」「～しなさいよね」など、命令形を基本とするものを指す。また「!」マークによって、語気の激しさを表しているものも含まれる。「～だ」というような常体文、または単に「～して」「～してよ」という場合には、顔面表情が困惑または怒りの場合に限り、このカテゴリーに含められる。

[驚愕・困惑・落胆の表出]

自他のいずれれに対する責任の帰属に関する表明はなく、単に、もたらされた結果に、驚き、困惑し、落胆していることを表情または発言(両者でもよい)によって示す行動

(顔面表情)困惑または普通の顔

(セリフの例)

「ああ」「せっかくかいたのに」「どうしよう」「せっかくの絵がだいなしだ」

[攻撃的行動]

次の(1)~(4)のいずれかに該当する行動

(1) 言語的攻撃行動

(定義)

相手に非があると考え、加害者を罵倒する、加害者に侮辱的な発言をするなどの報復的言動を遂行する。ただし、被害者としての正当な要求の表明は行わない。

(顔面表情)怒りまたは困惑

(セリフの例)

「ばか!」「ばかやろう」「このやろー!」「いじわる」「あんたなんかきらい」

(2) 威嚇行動

(定義)

加害者の身体、所有物に損害を加える、加害者の意志的活動を妨害する、加害者を社会的関係から排除するなどの報復的行動の遂行を、予告、または示唆する。

(顔面表情)怒りまたは困惑

(セリフ例)

「ぶっころすぞ」「ひどいめにあわせるぞ」「顔も見たくないわ」

(3) 加害者に対する過剰な補償的要求

(定義)

相手に非があると考え、加害者に対する不当に過剰な補償的要求、または実現不可能な補償的要求

を行う。

(顔面表情)怒りまたは困惑

(セリフの例)

「同じ絵をかいてよ」「この水ぜんぶなめろ」

(4) 嫌悪的な驚愕・困惑・落胆の表出

(定義)

自他のいずれに対する責任の帰属に関する表明はなく、単に、もたらされた結果に、驚き、困惑し、落胆していることを発言によって示す。

(顔面表情)怒り

(セリフの例)

「ああ」「せっかくかいたのに」「どうしよう」「うおー！」

[その他の非攻撃的行動]

次の(1)~(4)のいずれかに該当する行動

(1) 友好的な驚愕・困惑・落胆の表出

(定義)

自他のいずれに対する責任の帰属に関する表明はなく、単に、もたらされた結果に、驚き、困惑し、落胆していることを発言によって示す。

(顔面表情)笑顔

(セリフの例)

「ああ」「せっかくかいたのに」「どうしよう」「せっ

かくの絵がだいなしだ」

(2) 抑制的・忍耐的行動

(定義)

報復的攻撃行動も、許容的行動も取らず、苦痛、怒りなどの喚起された否定的な感情も、被害者の立場として正当な要求も抑制し、耐える。(顔面表情)普通の顔または笑顔

(セリフの例)

「・・・・・・・・」

(3) 事後措置の独語的表明

(定義)

自他のいずれに対する責任の帰属も行っておらず、単に、もたらされた被害の処理に要する行動や道具ついて、独語的に言及する。

(顔面表情)困惑、普通の顔、笑顔

(セリフの例)

「ふかなくっちゃ」「ぞうきん、ぞうきん」

(4) 自罰的行動

(定義)

自己の非を認める言動。

(顔面表情)すべて可

(セリフの例)

「わたしが机の上にバケツを置いたので、悪かった。」「ごめんね」